

---

## 糸魚を求めて

理学博士 五十嵐 清

戰禍のようやくおさまたた昭和22年6月希望と情熱に燃えて母校である武生高等学校の教壇に立った日のことが、さまざまと思い出される。早速生物クラブをつくって、生徒と一緒に武生周辺の山や川をくまなく廻ったり、越前海岸に磯採集に出かけ、素晴らしい海の神秘を眺めて心打たれたものである。その頃何かやってみたい。何か把みたいとしきりに考えていた。もともと魚が大好きであった私は県内の淡水魚相がほとんど未調査であることをつきとめ、まず魚の採集から始めてみた。図鑑を片手に標本の整理に忙しい毎日であったが、どうしても飽きたらば、師事すべき先生を探し求めていた。「淡水魚とその寄生虫」の著者である小林久雄先生が岡崎の教育大学に居られることを幸い知り、早速お訪ねすることにした。

今から20余年前の2月のとても寒い雪の日のことである。標本を片手に先生の門を叩いたところ、はじめての私を暖かく迎えられ早速魚の話である。感激にふるえながら先生のお教えの一つ一つを聞きもらすまいと必死だった。持参した魚はすべて日野川水系のコイ科魚類であったことを記憶している。

昭和39年、癌は遂に小林先生の命を奪ったが若くして亡くなられた先生が惜しまれてならない。先生の亡くなられるまでの15年間岡崎に通い続けた。先生の研究は鱗(Scale)の比較形態学的研究から系統分類を目指して居られたが、後で私がトゲウオ科魚類の鱗板(Scute)に目を向け、その研究に打込んだのも先生の影響が多分にあったものと思われる。小林先生の逝去は私にとって、まるで灯の消えたようで、その年はどうしようもなかった。焦燥と孤独のなかで苦しみ抜いたあげく、重い足を引づいて資源科学研究所に中村守純博士を、淡水研日光支所に白石芳一博士、鈴木亮博士をお訪ねしたことがよみがえって来る。思い余って山形大学に久佐守先生をお訪ねした。山形県は、素晴らしいイバラトミヨ *Pungitius pungitius* の生息県で、最上川流域のイバラトミヨの分布は私の研究心をかき立ててくれた。その頃久佐先生から今までの研究成果をまとめてみたら、とすすめられ、北海道大学教授牧野佐二郎博士を紹介され、新しい染色体の研究分野に踏切ることにした。牧野佐二郎博士は染色体の分野で世界的の権威である。私の研究テーマは「日本産トゲウオの比較形態学的研究、特に鱗板の変異と発達にもとづく進化について」として一切をこれに賭けることにした。

淡水域のトゲウオは海産型から陸封化し、長い地史の間に種分化を起したものと思われるが、主

に鱗板の形態と形成過程を調べてみると鮮かに種分化の方向が示され、その跡を追うことができた。その上染色体の研究は形態分化を見事に裏づけられトゲウオの系統関係が明らかにされた。例えばイトヨ*Gasterosteus*とトミヨ*Pungitius*の異属の間で染色体は $2n=42$ でありながら構造上に明らかな違いがみられ、同属のイバラトミヨ*Pungitius pungitius*とトミヨ*P.sinenensis*との間にも染色体とアイソザイムのうえに違いがみられるといった具合である。特に興味あることはイバラトミヨ*P.pungitius* ムサシトミヨ*Pungitius sp.* エゾトミヨ*P.tymensis*との間には染色体の構造上の違いはないが、アイソザイム（分子レベル）では僅かなパターンの差がみられ、これらの間の種分化が裏付けられた。短い期間にトゲウオ科のすべての種の染色体が明らかにされたことは例のことと思われる。

北海道大学も他の大学と同様にゲバ棒でキャンバスは一時騒然となつたが、理学部の片隅にひっそりとしている動物研究施設だけは、ひたすらに染色体を追い求めていた。若い研究者に混つて顕微鏡と取組んでいるうち、研究とはどんなにきびしいものかを身に沁みて感得できたことは大きな収穫であった。幸い理博の学位を授与されたが、これを契機にじっくり腰を据えて研究と取組んでゆきたい。

福井県教育研究所



